

【鵜飼の概要】

Q：鵜飼とは？

鵜飼は、人と鵜が協力して鮎を捕る慣行である。岐阜市では、毎年5か月の期間、毎晩、鵜匠が鵜とともに舟に乗り、長良川に繰り出す。鵜が川に飛び込んで魚を捕り、鵜匠が回収する。これを繰り返しながら、舟は次第に下流に移動していく。

Q：鵜飼はどこで行われるの？

現在、鵜飼の拠点には国内に11箇所ある。岐阜県では、長良川の2つの拠点で鵜飼が行われている。岐阜城の近く（岐阜市）と、小瀬（関市）である。

Q：鵜飼はいつ行われるの？

鵜飼は5月11日から10月15日まで毎晩行われる。唯一の例外は、中秋の名月（秋分に最も近い時期の満月）の夜と、滅多に無いが、水位の上昇や強風で漁ができない夜である。

Q：鵜飼はどのくらい続いているの？

鵜飼は古来の慣行である。岐阜県では、702年以降の複数の記録において、地域の仕事である鵜飼についての記載が見られる。日本の歴史の中では、将軍徳川家康（1543～1616年）や明治天皇（1852～1912年）のような著名人が、長良川の鵜飼を見るために訪れた。江戸時代（1603～1867年）には、鵜が捕った鮎で作る郷土料理、鮎寿司が、歴代の将軍への贈り物として献上された。1890年以来、長良川の鵜飼漁師は皇族に鮎を提供している。

Q：鵜匠はどんな人？

鵜匠は舟首に乗る上級の漁師で、10または12羽もの鵜に同時に指示を出しながら、鵜とともに働く。鵜匠は巧みな技で、鳥の縄をさばく。縄をほどいたり、捕った魚を集めるために鵜を舟の中に引っ張り込んだりする。「鵜匠」は、岐阜市の6家と関市の3家に与えられる、世襲制の肩書である。これら9人の鵜匠は、宮内庁職員に指名された日本で唯一の鵜飼漁師である。

Q：鵜匠はどうやって鮎を捕るの？

毎晩の漁を始める前、鵜匠は鵜の一羽一羽の首とおなかの周りに細い紐を結ぶ。首の紐は、ちょうど、鵜が大きい魚を完全に飲み込んでしまわない程度にきつく縛られている。鵜匠は鳥ののどが一杯になったのを見ると、舟に引き戻し、収集用の桶の上にその鳥のくちばしを置く。鳥は鮎を吐き、その後、再び川に飛び込む。この手順を繰り返す。

Q：鵜舟はどうやって操るの？

鵜匠とともに2～3人の船員が舟に乗り込む。舟の後部に乗る舵取りの責任者は、とも乗りである。船員は、長い棒（竿）とオールを使って舟を操縦する。中央の船員は中乗りである。中乗りも舟の操縦を担当するが、同時に鵜匠を補助することもある。少数の鳥を管理する中鵜遣い（通常、鵜匠の実習生）も舟に乗る場合がある。

Q：鵜と鵜匠はどんな関係？

鵜匠は自身の家で鳥を飼う。年間を通して、手で餌をやり、その他の世話もする。新鳥として届いたときから、鵜匠は鵜を操り、訓練する。過去、長良川では、鵜匠は鳥と同じ舟の上で寝食をともにしながら、シーズンオフの一部の期間を過ごしたこともあった。

Q：どうすれば鵜飼を見られるの？

出漁期には毎晩、伝統的な木製の舟が、観客を乗せ、鵜飼の様子を見物できるよう、漁舟に伴走する。これらの舟に乗ったお客は、鵜飼の壮観を見ながら、鮎をベースに作られた郷土料理を食べることができる。6艘すべての鵜舟が総がらみと呼ばれる編成で川幅一杯に並び、手間をかけた演出を行う。夜のフィナーレである。